

日本フランス語フランス文学会

cahier

13

mars 2014

I 2013年度秋季大会の記録

ワークショップ

1 「・・・と文学」—— 混淆性の探求に向けて

阿尾安泰 濱田 明
福島 勲 2

2 旅と文学

畑浩一郎 小野 潮
田口亜紀 6

3 クノー使用法

新島 進 河田 学
久保昭博 塩塚秀一郎 10

4 リヒャルト・ワーグナーと「フランス」

荻野 哉 中畑寛之
森口真司 吉田 寛 14

II 書評

L'Année Baudelaire 13/14

荻野 哉 18

Saori Osuga, *Séraphîta et la Bible : Sources scripturaires du mysticisme balzacien*

松村博史 19

Keisuke Misono, *Écrire contre le jansénisme : Léonard de Marandé, polémiste vulgarisateur*

野呂 康 21

寺田光徳『欲望する機械』

寺田寅彦 24

I 2013 年度秋季大会の記録

特別講演 1

Rousseau, le romantisme... et George Sand

Bruno VIARD (Université d'Aix-Marseille)

司会 坂本千代 (神戸大学)

in *Études de Langue et Littérature françaises*, n°105 (à paraître)

特別講演 2

De Proust à Mishima, le regard d'un écrivain français

Eric FAYE (écrivain)

司会 吉川一義 (京都大学)

in *Études de Langue et Littérature françaises*, n°105 (à paraître)

エリック・ファイユ「プルーストから三島へ — フランス作家の視点」(吉川一義訳)
『文学界』2014 年 1 月号、文藝春秋、223-233 頁に掲載

「・・・と文学」 — 混淆性の探求に向けて

コーディネーター：阿尾安泰（九州大学）

パネリスト：濱田 明（熊本大学）、福島 勲（北九州市立大学）

「・・・と文学」という提示の仕方は、ごく一般的に受け取られ、「政治と文学」、「社会と文学」、「メディアと文学」などといったテーマが自然な形で表れている。そのとき言及される「文学」は、あたかも明瞭で実体的で、それなりの基盤を備えているように見える。しかし、文学はこれまでの流れの中で、それほどはっきりとした形を取ってきたのだろうか。文学は、その歴史においてむしろ寄生的な存在であり、政治なり、社会なりが自らの存在を規定していく中で、そうした実体化に向かう動きとは異なる方向において、否定的な形で生み出されていったのではないだろうか。このワークショップにおいては、そうした文学の動きを 16 世紀、18 世紀、20 世紀の各場面において考察してみた。以下はそれぞれの報告の概要である。

1. 16 世紀の宮廷と詩

濱田 明

「文学は、その歴史においてむしろ寄生的な存在であり」とのコーディネーターの言葉に導かれ、本発表では、16 世紀フランスの宮廷における詩人の「寄生」のあり方、また宮廷と詩人たちの詩作品の関係について考察する。

フランソワ一世、そしてアンリ二世の治世においては王権が安定し、宮廷は政治だけでなく文化の場としても重要性を増す。入市式、祝祭、葬礼、仮面劇など宮廷の行事に参加し、言葉によって貢献する詩人は宮廷にとって不可欠な存在となる一方、詩人にとっては、王をはじめとする庇護者から認められ、役職や一時的聖職録などの経済的な支援を得るためにも宮廷に接近する必要があった。庇護者と詩人の関係は、詩集の巻頭の献詩をはじめ、庇護者への賞賛、呼びかけといった形で詩作品に反映される。

ロンサールは、ギリシャ・ラテンの詩を模範とし、中世以来の詩の伝統や当時の宮廷の詩を否定しながらも成功を収め、後に宮廷詩人となる。初期のカッサンドルへの愛を歌った『恋愛詩集』(1552 年)は、ギリシャ神話など、宮廷の読者には難解で、翌年には注釈が付された形で出版されるほどだった。靈感を

受け、予言者として言葉を発する詩人としての立場を主張し、叙事詩、賛歌、論説詩など意欲的に様々なジャンルに挑戦しながら、言葉の職人として宮廷の求めに応じた詩も書く。詩人としての理想と宮廷詩人としての現実の矛盾、葛藤にロンサールはどう折り合いをつけたのか。第六次（死後に第七次）を数える『総合作品集』に注目したい。様々な経緯によって発表した作品を、自らの判断にもとづき選び直し手を加えることにより、同時代そして後世に、ロンサールは自立した詩人としての姿を示そうとしたのではないか。

デポルトの『初期作品集』は甘く流麗な文体の恋愛詩中心の詩集で、アンリ三世の宮廷で人気を博した。多彩な詩を書いたロンサールと異なり、デポルトは『初期作品集』を増補改訂しながら、宮廷の読者が好む恋愛詩を書き続ける。しかし宮廷で認められ、僧院長の地位を得た後は、世俗的な詩の創作を放棄し、『詩篇』の翻訳へと向かう。やがて宗教戦争で王権が弱体化すると旧教同盟に接近する。ロンサール以上に栄達を極めたデポルトは、宮廷に「寄生」する必要がなくなると、宮廷から離れて行ったことになる。

道徳的な教訓を収めたピブブラックの『四行詩集』は 17 世紀まで広く貴族の子弟の教育に用いられ、穏健で保守的な教訓の書とされる。しかし、1574 年の 50 編、1575 年の新たな 51 編、そして 1576 年に新たに 25 編を加え 126 編となった三つの版を比較すると、普遍的な教えだけでなく、宗教戦争の時代への意識、とりわけ 1576 年版には強烈な宮廷批判が読み取れる。ピブブラックは、司法官、行政官としてアンリ三世に仕え、王が主導した「宮廷アカデミー」でも座長を務めた。独自の詩的世界を構築するロンサールやデポルトの詩集とは異なり、『四行詩集』は現実生きる人間に向け、生き方を説く教訓詩である。宮廷を政治的、文化的に主導する立場から、時代の危機意識を反映した教訓を盛り込んだピブブラックの『四行詩集』は、「宮廷と文学」という観点から興味深い作品であると言えよう。

2. 文学と呪術？

福島 勲

「文学と呪術？」と題した本発表では、わたしたちが「文学」と呼び慣わしている営みが、周囲の生活空間や人々との関係において、具体的な機能を有しているのだろうか、という素朴な疑問から出発する。もちろん、あらかじめ、「文学」とは公認された芸術の一領域、もしくは、「文学のための文学」といった現実から切断された自立的な存在であると居直ることができるのであれば、こうした問いはまったく無用にちがいないが、少なくとも制度としての文学が眼下で日々瓦解していく現在、こうした問いを発してみることも無駄ではないように思われるのである。

やや遠いけれども、パリのケ・ブランリー美術館／博物館の収蔵品をめぐる

議論を補助線としたい。この展示施設では、2006 年の開館以来、非西洋世界から運ばれてきたその収蔵品を、斬新な形と色を持った審美的なオブジェ (art) として展示するべきか、もしくは、ある地域と時代の文化を知るための民族誌学的資料 (artefact) として展示するべきかフランス国内外で議論され続けてきた。ちなみに審美的に扱うか、文化研究のための資料として扱うかという二択は、現在の文学研究の状況と大差ない。しかしながら、第三の道というものはないだろうか。

アンドレ・マルローの『黒曜石の頭』はピカソとアフリカの彫像との興味深い出会いを報告している。マルローによれば、作品制作中のピカソは、ふと訪れたトロカデロ民族誌博物館でアフリカ彫刻に出会う。その出会いは斬新な形と色に衝撃を受けたブラックやヴラマンクとも違うし、また、レリスが目撃したような現地の文化を民族誌学的に収集する人類学者たちとも違う。ピカソはアフリカ彫刻を、美術品でも民族誌資料でもなく、具体的な機能——聖霊たちに対して人間たちが身を守る武器としての機能——を持った「呪物 *fétiche*」として見出すのである。そして、制作中の作品を「呪術」的に大幅に描き直し、美術史上の転回点として位置づけられる《アヴィニョンの娘たち》(1907 年) を完成させたとマルローはピカソに語らせている。

マルローの証言の真偽は確かめようもないが、ピカソがアフリカ彫刻に着目したポイントは興味深い。それは純粋な形と色の驚きとも違うし、また、客観的な民族誌的記述とも別種の、観る者に作用してくる力への着目である。スーザン・ソントグは『反解釈』で「芸術とは呪文であり魔術である——これが芸術の体験のいちばん始めの形であったにちがいない」と述べているが、ひょっとしたらこの原点回帰とも言える発想は、昨今の「文学」の制度と価値の全般的瓦解へのくさびになりえないだろうか。ピカソが芸術の呪術的機能へと溯及することで現代美術を開いていったように、アルトーが提唱した「残酷演劇」が、審美的な文学性ではなく、まさしく観客に働きかけるその機能について強調していたように、また、バタイユが文学と読書という関係に供犠という人類学的な機能を投射してみせたように、わたしたちはもしかしたら「文学」という営為の機能やその存在理由について、審美的や資料的でないかたちで、再検討してみることが必要なのではないだろうか。もちろん、それを「呪術」のみに帰するのではないにしても…。

3. 読書という悪の創出

阿尾安泰

18 世紀の文学について、通常とは異なる語り方をしてみたい。17 世紀から受け継いだ伝統をしっかりと 19 世紀につなぐ 18 世紀といった駅伝の襷をつなぐような叙述とは違うアプローチを考えたい。そのため 18 世紀文学の大御所と

みなされるような作家たち、ヴォルテール、ルソー、ディドロといった固有名詞に敢えて言及せずに始めることにする。

この時代においては重視すべきは、読書という行為が注目を集めるようになったことである。ただここでは、シャルチエなどが指摘しているような読書という行為が音読を主とした集団的な行為から、黙読などを対象とした個人的、内面的行為へと移行したということとは別の面から考えてみたい。そのとき問題となるのは、読書というメカニズムである。いかなる基盤のもとに、この行為が成立するのか。そのとき出現するのは、そうした知覚体験の生理学的な基盤を探求する医学的な問題とともに、そこで獲得される知を考察する認識論的な問題である。さらに、そうした経験を集積する各個人が、宗教的な価値観が次第に後退していく状況の中で、新たな価値観を模索しながら、いかに秩序ある社会を形成するのかという課題も現れてくるのであった。

こうして文学をささえる読書という行為は 18 世紀においては、認識の根拠を問う美学的な問題であるとともに、それが及ぼす効果の大きさを考慮すべき社会的な問題でもあった。そこから、根拠の怪しい読書が及ぼす悪弊は、社会的に大きな被害を及ぼすという恐怖が発生することとなった。その悪として第一に考えられたのが、オナニズムであった。悪書に耽溺することは、自分の身を滅ぼす行為であり、また社会的にも害をなすとみなされたのであった。

こうした読書への危険にたいして当時の医学も介入することになる。ただここで注目すべきは、医学の介入の仕方が、当時の読書のメカニズムをささえる方式に依拠したものであったことである。読書におけるイメージ喚起力を最大限に利用したのである。オナニズムの病害に苦しむ患者の姿を克明に描写することで、その映像の生々しさが引き起こす恐怖心から、若者たちがこの害悪に染まらないようにしたのである。そこには読書が読者に刻み込むことができる鮮烈な印象を利用しようとする意図がある。いわば文学的な力の流用である。ただそうしたイメージの力の利用という点では、方向としては正反対になるとしても、当時のポルノグラフィックな小説群と変わらない。悪を攻撃する者が、悪に引きずり込む者と同じ武器を用いるという不思議な事態がこの時代に出現する。ただこうした事態も医学的な言説が姿を変え、新たな形で出現していく権力機構と結びつきながら、独自の社会規制網を形成する中で、別の配置を取っていくことになるのである。

旅と文学

コーディネーター：畑 浩一郎（聖心女子大学）

パネリスト：小野 潮（中央大学）、田口亜紀（共立女子大学）

畑 浩一郎

旅は文学作品を創出する重要なモメントのひとつである。しかし旅体験が作家の創作活動に対して干渉するさまは各人各様としか言いようがない。本ワークショップでは、とりわけ旅行記という旅人の体験が最も直截的な形で結実するテキストに焦点を絞り、フランス・ロマン主義時代を代表する三人の作家、シャトブリアン、スタンダール、ネルヴァルについて、彼らが自らの文学創造と旅との関係をどのように考えていたのかという問題を考察した。

19世紀は「旅の時代」と言われる。交通手段や宿泊施設の整備などにもない、かつてない規模でフランス人は国外へと足を伸ばすようになる。また刊行される旅行記の数も増大する。そうすると作家にとってはいかに自分の旅体験に独自の色をつけるかということが問題となる。しかし旅行記というのはある意味で語りの枠組みが固定されているテキストである。「訪れた場所について語る」というのがとりあえず作者と読者の間で交わされる了解事項であり、作家はそれを無視して自由に筆を揮うことはできない。一方でこうした執筆上の制約があり、他方で自分のオリジナリティを出したいという願望もある。そのわずかな狭間で作家たちはさまざまな工夫を試みることになる。ある者はフィクションを巧みに忍び込ませ、ある者は回想という手段を用い、またある者は他人の著作を引用することで、間テキスト性の編み目の中に自分の立ち位置を定めようとする。

また旅は作家にとってただ異境を訪問するという外的体験にとどまらず、自らの内面を問い直すための重要な契機ともなる。旅先での見聞、見慣れぬ景色、人々との出会いなどがある種、触媒のように働き、作家は自らの心の奥底に眠る考え、感情、記憶などを次第に呼び起こし、それらと対話を行っていく。こうしたきわめて個人的な要素をどのように文章に定着させるのか。またその上でどのように作品としての形を整えていくのか。少なくとも近代においては、旅行記というのは、作家が自らの文学創造の営みを模索するためのある種の実験室ともなるのである。

旅行記に自分語りの言説を融合させようとしたシャトーブリアン、旅人として、旅行記の読者として、そして旅行記の作者として、それぞれ異なる立場から旅と向かい合ったスタンダール、また自らの旅にまつわるいくつもの異なる文章を何度も加筆、削除、変更することによって、全く独自のテキストを組成することに成功したネルヴァル。彼らの営みの検討を通じて、フランス・ロマン主義時代の旅行記が提供する豊かな文学的鉤脈を再認識することができた。

1. シャトーブリアン 自分について語るということ

畑 浩一郎

スタンダールは、シャトーブリアンの『パリからエルサレムへの旅程』について「これほど鼻につくエゴティズムは見たことがない」と言って切って捨てている。訪れた土地について知識を提供してくれる代わりに、作家は絶えず自分のことばかり語っていると批判するのである。スタンダールの指摘は鋭い。なぜならこの作品の新しさはまさに、旅行記に自分語りの言説を取り入れたことにあるからである。

実は『旅程』の執筆当時、シャトーブリアンは自分について語るということについて模索を続けていた。ルソーの『告白』がもたらした衝撃のせいで、自分語りという言説はこの時代、容易く取り上げることができるものではなかった。ともすれば露悪趣味という誹謗を招きかねないこの行為を行うにあたっては、危険とは言わないまでも、少なくともある種の覚悟が必要だったのである。

シャトーブリアンにとって、旅行記はこの問題を解決するにあたって理想的な形式となる。なぜならば旅行記というのはそもそも、旅行中の自分の見聞を語るということが前提となっているからである。そこでは「なぜ自分について語るのか」ということに対して深刻な理由をつける必要はない。それはある意味、旅行記という作品形態が自然と要請してくる事柄なのである。つまり旅行記は「自分を語る」ということにまつわる後ろめたさを解消してくれる言説となるのである。

では「自分について語る」にしても自分の何について語るのか？ ここでは三つの事柄に着目したい。作家の信念、思い出、そして自負心である。シャトーブリアンは強烈なキリスト者としての意識を持って聖地エルサレムを訪れた「巡礼者」である。それを受けて彼の旅行記はイスラーム教徒に対する強い偏見に彩られている。また『旅程』では、サン・マロやコンブール、あるいは北米旅行についての作家の思い出が想起される。旅行記の語りは本来旅人の移動を追う形で水平方向に伸びるのだが、この作品ではそこにくさびのように過去の回想が打ち込まれていく。最後に作家は、自分の存在が歴史の中に記憶として刻まれることに強いこだわりを見せている。それは作品中において作家が何度も自分の名前に対する執着を見せることに見て取れる。

作中でまさに「炸裂」するこうした作家の強い自己意識こそが『旅程』の魅力であり、この作品が今日まで長く読み継がれている理由のひとつとなっている。

2. 旅行者、旅行記の読者、旅行記作家としてのスタンダー

小野 潮

スタンダーは旅を愛すと同時に、旅行記の熱心な読者であり、自身も4冊の旅行記を生前に刊行した。本報告の目的は、旅行者スタンダー、旅行記の読者としてのスタンダー、旅行記作家スタンダーに通底するものは何かを探ることである。

スタンダーが旅を愛する理由は、旅が人間研究の機会を与えてくれることであり、自国民と外国の民の比較によって、さらには自分の中に新たな感覚を起動させることによって自己を知る機会を与えてくれることだった。しかし、スタンダーの場合に逆説的であるのは、旅行者が自己を知るのは、自己が変化することによってであるという認識である。

スタンダーが他の作家が書いた旅行記を称賛するとき、また非難するときにも、このような考え方は効力を発揮する。旅行記作者がすべきことはスタンダーによれば旅先で触れた事物・外国人の考え方、感じ方・生き方によって引き起こされる自己の「魂の震え」を記録することである。スタンダーによって批判される旅行記作者たちは、自分の学識・偏見に閉じこもり、旅行というすばらしい経験による自己の変化に身を委ねることをしないがゆえに批判されているのである。

また旅行記というジャンルの有効性は、旅という行為が旅行者に与えるのと同様に、読者に自分の習慣を反省させ、読者の自己を変化させることができるか否かという点に求められることになる。

こうした考え方は、またスタンダー自身の旅行記述の性格をも規定することになる。スタンダーが生前に出版した旅行記はいずれも日記形式を採用している。この形式の採用が、記述の真実性、そこにもられた感覚の真実性を保証してくれる。日記形式の採用により、作者は語り手＝旅行者の日々の「魂の震え」を忠実に再現できるようになる。

また、彼が読者との間に作り上げようとする関係もまた重要である。スタンダーは読者に「旅行者＝語り手」へ自己同一化していくよう誘う装置を幾重にも施している。これによって、読者は、「旅行者＝語り手」と同様の自己の変化に身を委ねるようになる。

このように、旅行者スタンダー、旅行記の読者としてのスタンダー、旅行記作者としてのスタンダーはみごとに一貫性を示している。それはそこで問題になっていることが言わば「自己の移ろいやすさ」であるだけにいっそう

興味深いと言えるだろう。

3. ネルヴァル 旅行記と小説のあいだ

田口亜紀

七月王政下における旅行記は、ジャーナリズム、鉄道の黎明期に属し、それ以前の時代の有目的移動とも異なり、また、観光が進んでいく第二帝政期以降の旅とも違う。1830年代から40年代にかけて、これまでにないほど多数の旅行記が書かれる。1842年のフランスにおいて、全刊行物に対して十九パーセントの書物は旅行記であった。その中でも現在まで読み継がれているネルヴァルの『東方紀行』について、発表を行った。

ネルヴァル『東方紀行』の特徴のひとつは、継ぎ合わせの旅と継ぎ合わせの旅行記であるということであり、本発表ではネルヴァルが同じ素材を何度も扱っては加筆、削除、変更、組み替えや結合を繰り返して〈書物〉を仕上げる手法に注目し、その結果どのような効果が得られたのかという点を考察した。

まず、当時の旅行記には必ず序文が置かれるが、ネルヴァルの『東方紀行』には作者の意志表明の場としての前置きはなく、作品冒頭からすでに旅は始まっている。この点から、ネルヴァルは旅行記と小説の融合を試みていたことが確認できる。

また、ネルヴァルが初稿を書いた時点では、必ずしも、向こう見ずなオリエント旅行者を描く構想を抱いていたわけではないが、やがて荷物、地図、紹介状、費用など周到な準備が必要になるオリエント旅行の記述に転用した。『東方旅行』編集の時点でヨーロッパ旅行と東方旅行を繋ぎ合わせることで、単身、鞆一つでオリエントに向かう希有な主人公を作り出した。この主人公は「フラムール」の一形態であろう。このようにネルヴァルは、ある文脈から違う文脈へのテキストの移し替えによって大きな効果を生み出した。

さらに、『東方紀行』は個人的神話の集大成と目される傾向にあるが、ネルヴァルが自分の生きる現実を鋭く見据えたことに言及した。

ネルヴァルが、旅日記、書簡体、コントなど異なる形式の記事を一篇の物語として再構成するのに十一年必要だった。その間に、政治・社会情勢や文学を取り巻く状況も変化したので、編集作業によって、時のふるいにかけられても読むに堪える一本の作品を仕立てた。つまり芸術家として文学作品を後世に残すことを念頭に置いて、作品に通時的かつ共時的な性格を付与したのだった。

発表の補足で、シャトーブリアン、スタンダール、ネルヴァルをつなぐ糸として«touriste»のテーマを提案した。

クノー使用法

コーディネーター：新島 進（慶應義塾大学）

パネリスト：河田 学（京都造形芸術大学）、久保昭博（関西学院大学）、
塩塚秀一郎（京都大学）

レーモン・クノーの主要作品を収めた叢書〈レーモン・クノー・コレクション〉が2013年1月に完結した（全十三巻、水声社）。クノー作品ははじめ1960年代から1970年代にかけて翻訳がおこなわれ、それら訳業は前衛作家の旗手としてのクノーの姿を日本に定着させたと言える。では、その約40年後になされた今回の訳業にはどのような意味があったのだろうか。ひとつには、クノーという作家の多様な側面を（再）発見する一助になったではないか。本ワークショップでは、同コレクションに関わった四人の訳者が集い、21世紀にクノーを読むことの新たな意義、その多様性を示し、それらを「使用法」という観点から考察することを目的とした。

新島はSF文学や日本のポップカルチャーとクノー作品に施されている仕掛けを対比させ、河田は創作教育の現場における『文体練習』の使用例と、テキストで作動している細部のゆらぎを論じた。久保田は作品における口語使用の目的、その独自性をクノー自身の言語論、文学論を通じて明かそうと試み、塩塚は街路をめぐる二つのテキストを比較、〈はかなきもの〉へのまなざしという点からクノーが目指した街路を語ることの意義を問うた。各発表でクノー作品の持つ「異化」の力がたびたび言及されたが、マジックワードに陥ることなく、おのおのの議論のなかで具体的に検証された。また、ひとつの発表でなされた指摘が他発表のテーマと呼応するなど意外な発見も多かった。発表後には会場との質疑応答がおこなわれ、クノー再発見の貴重な機会となった。以下、論者ごとの報告を列挙する。

新島 進

はじめに、翻訳を担当した『青い花』（1965）で用いられたクノーの意匠、つまり翻訳に際して苦悩した点（ネオフランセ、古語・擬古語・口語・造語の使用、地口、既存の文学作品からの膨大な引用など）を紹介し、クノーがいかに

言語を異なるものになっているか、その具体的な例を示した。そのうえで、世界の異化を目的とする SF 文学、さらに「制度」や従来の物語言説のズラしを特徴とする現代日本のポップカルチャー作品と『青い花』との比較をおこなった。ユートピア作品の多く、また一部の現代 SF 作品は架空言語の創造に勤しみ、それは「言語を成り立たせている社会のコンセンサスから逃れたいという欲求の表われ」(マリヤ・ヤゲーロ)と考えることができる。では、そうした試みと、ネオフランセをはじめとするクノーの言語への介入にはどのような相違があるのだろうか。この問題については、前者が体系を目指すのに対し、後者は体系を逃れる傾向があり、異化の方向性が異なることを指摘した。次に「歴史の終わり」というクノーの命題をとりあげた。この概念は SF 文学が一貫して描く世界終末に接近するが、その円環的な時間構成と、『青い花』ほかのテキストで用いられるコピーアンドペースト（同じフレーズ、一節、場面の故意のくり返し）的技法が生む時間錯誤は、現代日本の漫画アニメ作品で執拗に用いられている物語のループ構造に通じているように思われる。これは現代的なセカイ表象におけるクノー使用法であり、クノーの新しさが古びていない一例ではないかと考えた。最後に、サリー・マーラという女性名を筆名として選んだことや、『地下鉄のザジ』、『青い花』に見られる男性名と女性名の故意の混乱について触れた。これもまた性差という制度に抗し、徹底したズラし、性の境界の行き来を自在におこなう日本のサブカル作品の戦略に呼応することを指摘した。

河田 学

レーモン・クノー『文体練習』（初版 1947）の「使用法」のひとつは、創作教育の現場にみいだすことができる。たとえば、イアン・マキューアン、カズオ・イシグロらを輩出したことでも知られる、英イースト・アングリア大学のクリエイティヴ・ライティング・プログラムのディレクター、アンドリュー・カウワンは、創作をめぐる 12 のテーマについてエクササイズを交えながら論じた著書『小説執筆の技法』（Andrew Cowan, *The Art of Writing Fiction*, Longman, 2011）のなかで、『文体練習』をとりあげている。

本発表で第一に確認したのは、発表者の『文体練習』翻訳の体験をとおして、いかに『文体』がよくいわれるような「なんの変哲もない物語の九十九とおりの変奏」ではないという事実である。このことは、たとえばバスの向き、ボタンの位置といった細部における各文体間のずれにも見いだすことができるし、置換、品詞への分解などの機械的操作をテーマとした文体において、操作の対象となったはずの原テキストを確定できないという事実にも反映されている。これらのゆらぎは必然的に読者の意識をテキストの細部へと惹きつける。そして、「なんの変哲もない物語」という理解もまた誤りである。バスのなかで見か

けた変人と同じ日にべつの場所で再会するという出来事は、（たとえそれがクノ一の日常的な体験に根ざしたものであったとしても）物語論でいうところの物語価値性をもつものであり、小説的な出来事なのである。

カウワンは異化を論じた章のなかで、ペレック、マシューズといったほかのウリポ同人たちの試みとともに『文体』を紹介している。それは表面的には、『文体』に収められた一部の文体がペレックらのテキストと共有する強力な異化作用のためだが、上述のような細部への視線、小説的なものの探求は、カウワン自身が「練習」の素材として著した短いテキストに色濃く反映されているのである。

久保昭博

レーモン・クノ一の小説を特徴付けるひとつの特徴は、いうまでもなくその口語・俗語をふんだんに取り入れた文体にある。処女作『はまむぎ』から後年の『青い花』にいたるまで、彼はほぼ一貫して口語・俗語を用いた作品を書き続けた。このような文体への嗜好は、クノ一だけでなく両大戦間期の少なからぬ作家に見られるものであるが、彼らの多くがポピュリズム的傾向を打ち出していたのに対し、クノ一はそうした政治的態度から明確に距離をとった。では彼の文体の射程はどこにあるのか、それを一九三〇年代の言語学と文学に関する批評的テキストから明らかにしようとする報告である。

まずは言語学。クノ一はヴァンドリエスの著作を参照しつつ、文語と口語を対立させ、後者の使い手を民衆と同一視したうえで、言語の「生命」が後者に存することを認めた。しかし彼は言語学者のように口語＝民衆語を唯一正統な言語と見なすことをせず、言語の「美」は生命の抜け殻となった文語にも存すると述べて、両者を統合する「新たな文学」の必要を説く。クノ一にとって重要だったのは、芸術上の階級闘争や情感の直接的発露などではなく、一切を相対化する笑いとともに書き言葉を動態化させ、文学言語の使用域を広げることであったのだ。

クノ一の民衆語＝口語に対するこの両義的な態度の意義は、同時代に書かれた彼の文学論を補助線とすることでより明確になる。主に『ヴォロンテ』誌に掲載された論考を通じて、クノ一は、文学者が公衆におもねって科学主義あるいは政治参加に身を委ねるか（自然主義ないしポピュリズム）、逆にそれに反発して純粹主観を表現する選良主義をとるか（前衛詩）の二者択一をするしかない状況に置かれていると分析し、文学のモデルニテが陥った隘路を批判した。そこで彼が提唱するのが「古典主義」である。とはいえそれは反動的な復古主義とは遠く、レトリックという文学の共通言語を復権させることを意味した。

クノーは、文学論と言語論の双方を通じて、自律性を保ちつつ「共有財」となる文学を構想したのである。

塩塚秀一郎

1930年代後半、レーモン・クノーはある日刊紙に「パリをご存知ですか？」という標題のコラムを連載していた。これはパリに関するトリビア的知識を問う問題を一日三題ずつ出題するものである。クノーの全作品中、このコラムの内容をもっとも色濃く反映していると言われるのは、詩集『街路をめぐる』（1967）である。本発表では、コラムと比較しつつ、この詩集における「知識」と「現場」の関係を概観したのち、『街路をめぐる』という詩集が、どのような構えをもったもので、何を意図した企てだったのかを考察した。

三十年の歳月によって隔てられた二つの試みは、いずれもフィールド調査と文献調査に基づいているにも関わらず、前者はより「知」に傾いており、後者は現場の「はかなきもの」をも積極的に捉えつつ、「知」と「現場」の関わりをより前面に押し出すものとなっている。クノーが『街路をめぐる』の準備のため三十年ぶりに街を歩きまわったのは、1966年当時、再開発の波に押され、パリが急速に姿を変えつつあったからであった。クノーは、街が潜在的な破壊に脅かされていることを意識して、〈はかないもの〉を捉えようとしていたようだ。『街路をめぐる』には、落書、貼り紙、看板、ゴミなどが好んで取り上げられており、〈はかないもの〉が取り込まれることによって、詩そのものもある種の「はかなさ」を帯びていると言える。流行歌の歌詞や看板の文句、新聞投書欄の標題など、時間が経てば理解されなくなる要素をあまりに多く含んでいるからだ。

だが、『街路をめぐる』は「詩」として読み継がれることよりも、読者自身が街路の変わりゆく風景を捉えるよう促す試みであったとも考えられる。変わらない「知」とはかない「現場」の対比が常に問題とされているのもそのためなのではないか。ウリポが生み出すのは「作品」ではなく、誰もが利用可能な「形式」なのだとクノー自身が強調しているごとく、『街路をめぐる』も街路との関わり方をめぐるひとつの提案としてこそ意味をもつものであると言えるだろう。

リヒャルト・ワーグナーと「フランス」

コーディネーター：荻野 哉（大分県立芸術文化短期大学）

パネリスト：中畑寛之（神戸大学）、森口真司（大分県立芸術文化短期大学）、
吉田 寛（立命館大学）

リヒャルト・ワーグナーが、彼の楽劇作品を理解しようと望むフランスの人々のために著した論考「音楽書簡 (Lettre sur la musique)」が、シャルル・ボードレールのワーグナー論に影響を与えたこと、そして1861年の『タンホイザー』のパリ公演の失敗にもかかわらず、ボードレールやステファヌ・マラルメといったワグネリアンが次々と誕生したことは、すでに多くの研究者によって指摘されている。彼らは音楽作品そのものに加えて、芸術、政治、宗教、そして神話を包摂したワーグナーの思想に大きな衝撃を受けたのであった。こうしたワーグナー受容の内実は、そこに見られるフランス人の対ドイツ感情の問題なども射程に入れたうえで、さまざまな角度から捉え直す必要があるのではないだろうか。

本ワークショップは、上記のような趣旨から、フランス文学（中畑）、指揮法（森口）、感性学（吉田）の異なる分野のパネリストを迎えて企画された。最初に、コーディネーター（荻野）が、ボードレール以前のワーグナー受容に関する簡略な紹介をおこなった後、三人の報告に移った。以下に、各パネリストの執筆された概要を掲載する。

19 世紀末フランスにおけるワグネリズムとマラルメ

中畑寛之

中畑は、この時期のワーグナー受容について、マラルメの事例を念頭に、1. 政治・社会的制約、つまりフランスでの上演不可能性の問題、2. そこから生じることとなる文献を介した理論的側面からのワーグナー理解に係わる問題、そして3. 絶対音楽の理念についてのフランスの無理解の問題、以上三点を受容における「歪み」として指摘した。ただし最後の問題については、近刊された黒木朋興『マラルメと音楽』（水声社）に詳しく、また発表者の能力を超える議論でもあり、本ワークショップでは専ら1. と2. について問題提起を試みたのだが、それについても論点を十分に掘り下げて提示することができなかった。聴衆の

方々にはこの場を借りて深くお詫びしたい。

普仏戦争後の政治・社会的な問題はよく知られたことだが、90年代になるまでフランス国内ではワーグナー楽劇を観ることができず、コンサートでの断片的な演奏に限られたという事態がひき起こす受容の特殊性をまずは理解しなければならない。また、反ドイツというナショナリズムは、翻ってフランスにおけるワーグナー的作品の不在や劇場のあり方を意識させたことは確かとはいえ、ワーグナーの主張する「ドイツ的なもの」を見誤らせてしまった。彼に倣い古い民謡や伝説に「フランス的なもの」を探り、マンデスなどと共にオペラを制作した音楽家たちは観るべき作品を遂に産み出せなかったのである。

ワーグナー理解の努力は、『ワーグナー評論』誌を中心に、音楽家の指揮棒よりもむしろ文学者のペンによってなされることになる。それゆえ、論者それぞれの批評を経る以上、我々はそこに生じる相互影響を考慮に入れる必要がある。実作以上に理論書による理解はワーグナーを理念的に、さらには創造的に受容させる結果となっただろう。例えばデュジャルダンの試みにはウィゼワの影響が夙に指摘されている。マラルメは、難解とはいえ、当時ひとつの方向性を指し示し得た論考を書くことができたが、その理由には彼の天才だけでなく同時代の文学者たちとの批評的対話をも想定すべきだと思われる。したがって 19 世紀末フランスのワーグナー受容とは、「～への影響」といった直接的＝個別的なものではなく、多様に絡み合った複雑なものであり、それゆえ専門を異にする研究者による総合的な共同研究が不可欠となることを中畑は指摘したかったのである。

ワーグナーの楽劇が持つ魅力

森口真司

ワーグナーの楽劇が持つ魅力、悪魔的といってもいいほどの中毒性を持つ魅力に、私も高校時代から少しずつ取り憑かれたわけですが、おそらく多くの方がそうだったように、最初は楽劇そのものではなく管弦楽部分の魅力の虜となりました。まだレコードが高価な時代で、手に入るものといえば序曲・前奏曲集の類でしたからそれも当然といえば当然のことと思います。ちなみに初めて鮮明にワーグナーの音楽を意識したのは、中学3年生のとき公開された映画「地獄の黙示録」で使われた「ヴァルキューレの騎行」でした。（40代以上のかなりの方が同じ経験をなさっているのではないのでしょうか。）19世紀末のフランス人がワーグナーに熱中したのも、詩、演劇的な面より音楽そのものにかかなりの比重があったのではないかと思います。

ここでワーグナーが創ったものの中でも最上の部類に入ると思われる、楽劇「ヴァルキューレ」の第3幕からヴォータンのブリュンヒルデとの別れの部分を聴いていただこうと思います。ここでもさまざまな所謂「ライトモチーフ

(示導動機)」が繰り返し聞こえてきます。(具体的に「魔の眠り」「まどろみ」「ジークフリート」「魔の炎」「ヴォータンの槍」の動機をキーボードにて演奏)さて、まず耳につくこれらの「動機」はほぼすべてオーケストラが奏でており、歌手がこれら「動機」の旋律を歌うことはあまりありません。ワーグナーと同一年のヴェルディを代表とするイタリアオペラにおいては、旋律をすべて歌手が支配していることとまったく正反対です。ワーグナーは、伝統的なイタリアオペラにおける歌手の圧倒的な優位、を嫌ってそのような作曲のしかたをしたわけです。それにしてもオーケストラ部分の充実ぶりは比類の無いものです。

ワーグナーが同時代ならびに後世の作曲家たちに与えた影響は絶大なものですが、その中でもオーストリアの作曲家アントン・ブルックナー（1824-1896）とベルギー出身のフランスの作曲家セザール・フランク（1822-1890）について少し。ブルックナーは初期の交響曲でワーグナーからのあからさまな引用を行っているほどのワーグナー信奉者で、フランクはその半音階的な旋律づくりや和声の使い方において極めてワーグナー的な書き方をしており、同時代人の中ではもっともワーグナーの影響を受けている作曲家といえるでしょう。その二人がまったくオペラを書いていない（フランクは数点残していますがまったく演奏されない）という事実は大変興味深いことです。二人とも詩人、劇作家としてのワーグナーではなく、専らワーグナーの和声法、管弦楽法に興味があったということです。

リヒャルト・ワーグナーとパリ

吉田 寛

リヒャルト・ワーグナーは、その生涯を通じて少なくとも八度 — 滞在中の細かな出入りを数えればそれ以上 — パリに滞在している。本発表では、ワーグナーにとってパリという都市がいかなる場所であったのかを、時代を追いながら概観し、ワーグナーのドイツ人としてのナショナル・アイデンティティがいかに〈フランス〉を仮想敵にして構築されたかを検証する。

ワーグナーにとって重要な意味を持つパリ滞在は二度ある。1839年から42年までの第一次滞在と1859年から62年までの第二次滞在である。

第一次滞在時に彼は、貧しい外国人芸術家として不遇を託つ中で「ドイツ人」としてのアイデンティティに目覚めた。彼は自作のオペラを上演することはできなかったが、その代わり、「ドイツ精神」をめぐる後の思索のきっかけとなる評論（「ドイツの音楽について」など）をパリの雑誌に多数寄稿した。この滞在以来、ワーグナーはパリの文化や風俗を嫌悪し、それに対抗するかたちで「ドイツ精神」を構想するようになるが、ヨーロッパにおける革命の震源地がパリであることは一貫して認めており、チューリヒ亡命時代（1849年～58年）にも — 結局その都度失望して帰るだけだったとはいえ — 度々パリを訪れては、

革命の動静をうかがった。

そうした中、1859年の第二次滞在の機会が訪れる。その主目的は、オペラ座での《タンホイザー》上演だった——そしてその目的は上首尾とは言えないまでも何とか達成された——が、それ以上に重要だったのは、イタリア劇場での演奏会（1860年）によってワーグナーの音楽（序曲や前奏曲）が初めてパリの聴衆の耳に届いたこと、そして『音楽書簡』（1861年）によって彼の思想が初めてフランス語圏の読者に理解されたことであった。彼の音楽と思想に直接した文学者や芸術家の中からは次々に「ワグネリアン」が誕生した。また『音楽書簡』を注意深く読むなら、それが単に彼のそれまでの理論の要約や紹介には収まらない、独自の論点を含んでいることが分かる。その一つが、ドイツ人が「普遍人間的芸術形式」を創出した、という主張である。この著作の中で彼は、フランス人に対するドイツ人の優位性と、音楽という芸術が持つ「普遍人間的」性格を巧みに結び付けた。いわば彼は、第一次滞在時にパリからもらい、ドイツに持ち帰って取り組んだ「宿題」を、そこできっちり「提出」したのだった。

以上の報告の後におこなわれた討論および質疑は、各パネリストによって提起された問題を深く掘り下げたものとなった。コーディネーターの立場としては、森口の報告にもあるように、フランスにおいてワーグナー芸術のどの要素が結局関心と呼んだのかという点が、このテーマの考察にあたって鍵であることをあらためて認識させられた。受容の具体的な問題に関しては、『ワーグナー評論』の当時のあり方や、ベルギーにおけるワーグナーの上演状況などを考慮に入れるべきではという意見が、フロアから聞かれた。また、吉田が検証した、ドイツ人が「普遍人間的芸術形式」を創出したというワーグナーの主張は、それに対する批判的な乗り越えとしてマラルメの（特に「宗教」をめぐる）思想を捉え直すという観点が提起されるなど、さまざまな分野の研究者にとって示唆に富むものであったと考えられる。本ワークショップのテーマは、中畑が指摘するとおり「多様に絡み合った複雑な」様相を帯びているが、パネリストおよび参加者の方々によって生産的な議論の場につながったことを、この場を借りて感謝申し上げたい。

（荻野）

Ⅱ 書評

L'Année Baudelaire 13/14, Honoré Champion, 2011.

評者：荻野 哉（大分県立芸術文化短期大学）

国際ボードレール研究誌である *L'Année Baudelaire* の第 13・14 号は、2007 年 1 月に亡くなった阿部良雄氏の追悼号である。中地義和氏による内容紹介、阿部氏への深い尊敬と友情の念に満ちたイヴ・ボヌフォワ氏の寄稿文に続いて、1994 年 3 月にコレージュ・ド・フランスで阿部氏が四回にわたっておこなった講演「ボードレールと歴史」が掲載されている。つぎに、計 11 名の日本人研究者による論文が収録され、最後に、2009 年度秋季大会（熊本大学）におけるジョン・エドウィン・ジャクソン氏の特別講演が掲載されている。本稿では、「阿部良雄へのオマージュ」という副題をふまえて、阿部氏の研究手法や成果の独自性に照明を当てた北村卓・鈴木啓二両氏の論考に注目しつつ、記述を進めることとしたい。

北村氏は、日本におけるボードレール受容の展開を、上田敏、永井荷風、芥川龍之介、福永武彦らの仕事を取り上げつつたどったうえで、阿部氏のもたらした成果がそれまでの流れと決定的に異なると位置づけている。北村氏によれば、文学研究において学問と創作とが渾然一体をなしていた明治期はもちろんのこと、大正期後半からボードレールが学問研究の対象となっても、文学創造の場における強烈なボードレールの像は、研究対象としてのボードレールをとらえる基本的な姿勢に深くかかわってきた。しかし、作品の註釈は、詩人の「志向性のことごとく、そしてそれらの複雑性を美的選択あるいはエクリチュールの一線の上に収斂させる詩人の連続的投企の一々を意識化する」（『悪魔と反復 — ボードレール試解』、1975 年）難解な作業であると主張する阿部氏の態度は、そうした流れとはきわめて異なる位相にある。阿部氏はボードレールを論ずる際に、「作品を産み出すに当たっての着想と方策を練り上げてゆく、芸術的ないし詩学的主体としての詩人の選択を、状況との関りにおいて次々に定義すること」を試み、最終的に「ボードレールと名付けられる芸術的主体がさまざまな迷妄からの解放を通じて自由を獲得してゆく過程」（『シャルル・ボードレール 【現代性の成立】』、1995 年）を物語ることを目指して、日本の文学的環境の強力な磁場からボードレールを解放したのである。

鈴木氏は、ボードレールを厳密にその歴史的状況の中に置き直そうとする阿部氏のこうした方法的探索を、『西欧との対話 — 思考の原点を求めて』（1972 年）を参照しながら検証している。阿部氏はそこで、「事実の観察から出発して

の帰納」という徹底した経験主義的手法と、自分で体系を構築していく理論化の作業との葛藤（「方法崇拜と経験論的偏向との葛藤」）について述べている。そして阿部氏は、このような徹底した方法的葛藤と懐疑の果てに、あくまでも個人の精神の中で、抽象的な思考と現実との間に「鋭い緊張関係」を成り立たせることを最終的立場として選び取ったと、鈴木氏は指摘する。

コレージュ・ド・フランスでの阿部氏の講演は、まさにその立場が明晰に反映されたものである。1855年にパリで開催された万国博覧会の美術部門の批評文を中心として、当時の進歩主義を前にしたボードレールの歴史観の独自性と、詩・批評の両面で展開した「現代性」(modernité)の概念との関係が、氏特有のエクリチュールによって厳密に解明されている。とりわけ、「猶予」の時としての現代における芸術の可能性に関して、結論部で開陳される庭園をめぐる議論は、単線的な近代芸術史観とは異なる思考のありかを指し示すものとして注目に値する。そして、ボードレールの作品の多様な側面にさまざまな角度から光を当てつつ、「現代性」をめぐる問題に共通してかかわっている日本人研究者の多くの論考（「窓」というモチーフを切り口として、ボードレールの詩的感性と存在論に光を当てた廣田大地氏の論考が、個人的には興味深い）、および、神話とアレゴリーの交換のテーマをボードレールの読解によって解明する綿密さが、ネルヴァルやヘルダーリンをも射程に入れる視野の広さと融合したジャクソン氏の講演を読む時、われわれは、「阿部良雄へのオマージュ」という副題の重みをあらためて実感することとなるはずである。

Saori Osuga, *Séraphîta et la Bible : Sources scripturaires du mysticisme balzacien*, Honoré Champion, 2012.

評者：松村博史（近畿大学准教授）

『セラフィタ』は、作家バルザックが若い頃から傾倒してきた神秘主義の世界観を小説の形にまとめたものである。『人間喜劇』の作品群には、『谷間の百合』を始めとして神秘思想的な要素が随所に見られるが、この作品はその集大成であり、『追放者たち』『ルイ・ランベール』『セラフィタ』という彼の神秘主義的作品をまとめた『神秘の書』においても頂点を成す。ソルボンヌ・パリ第四大学に提出した博士論文に基づく本書において、大須賀沙織氏は『セラフィタ』の典拠となっているスウェデンボルグを中心とする神秘思想家たちの著作、それに聖書の引用などを博搜し、そこからバルザックの神秘思想の核心に迫ろうとする。

神秘思想についての理解は当然キリスト教についての知識を前提としているが、大須賀氏も序文に書いている通り、宗教的・文化的背景の異なる日本人にとって、キリスト教というテーマを手がけるのは容易ではない。しかも『セラフィタ』はバルザック作品の中でもとりわけ難解とされる。だが大須賀氏はこのテーマに真摯に取り組んでいる。むしろキリスト教文化に対する距離があるゆえにこそ、西欧人に見えないことが明確に示されることもある。かくして大須賀氏は第一部「バルザックにおける聖書」で、この作家と聖書との関わり、さらには『セラフィタ』に見られる聖書の引用やイメージの諸相を取り出している。ここではバルザック自身が参照したであろう当時の聖書の検証から始まり、スウェデンボルグが使用した聖書にまで考察が及んでいる。これらの文献学的背景を踏まえた上で、それに続く部分では『セラフィタ』に見られる聖書の引用や、作品に描出された聖書の場面について検討が加えられ、バルザックがそこにどのような独自の解釈を加え、聖書の記述をいかに小説の世界に移し替えているかが詳しく分析されるのである。

さらに第二部「セラフィタの三つの聖書的表象」においては、両性具有の性質を持つセラフィタ＝セラフィトゥスの熾天使、キリスト、神の言葉という三つの象徴的側面が詳述される。セラフィタが天使的な存在として描かれるのは自然なことで、そもそもバルザックは『セラフィタ』の着想を友人の彫刻家テオフィル・ブラの作品『礼拝する天使』から得た。この作品は現在、北フランスの都市ドゥエのシャルトルーズ美術館に所蔵されている。ドゥエはブラの出身地であると同時に、バルザックの作品『絶対の探求』の舞台としても有名である。バルザックにとってブラの彫刻は天使の中でも最高位のセラフィム（熾天使）の姿を象っていた。同時にセラフィタは人類の罪を背負い贖罪の人となったキリストと同じ雌羊のイメージでも表象され、最終章の「被昇天」においてセラフィタの霊は天使に姿を変えて天に昇っていく。そして最後はセラフィタが象徴する言葉という側面。セラフィタは神の言葉が人となった存在であり、ついには神の言葉自体へと還るのである。

第三部の「『セラフィタ』における神秘主義」は、さまざまな神秘思想家、とりわけスウェデンボルグの著作がバルザックにどのように影響したかを追究する。バルザックが自伝的小説『ルイ・ランベール』において、少年時代から神秘思想の著作に親しんでいたと書いているのは有名な話である。バルザックにとって神秘主義とは、聖書の真意に迫り、原始のキリスト教徒の精神を再発見することに他ならなかった。ここではヤーコプ・ベーメ、フェヌロン、サン＝マルタンなどの神秘思想とバルザック作品との比較がなされ、最後にスウェデンボルグの思想の影響についての詳しい検証に入る。大須賀氏はまず、アンブリエール＝ファルジョーによって発見された1833年1月12日付けの装幀の請求書に見られる「8巻のスウェデンボルグ」の中身は何かを突き止めようとする。さらにはバルザックがスウェデンボルグ思想の概説書だけに基づいて『セ

ラフィタ』を書いたという従来の説を覆し、当時の翻訳を通して、『真のキリスト教』などの原典から直接的に影響を受けていたことを、スウェデンボルグの著作を細かく読み込んだ上でバルザック作品と比較しながら証明してみせている。

今後、『セラフィタ』やバルザックの神秘思想についてのいかなる研究も、大須賀沙織氏のこの論考を避けて通ることはできないだろう。大須賀氏はこの著作のあとも、昨年出版された『神秘の書』（水声社、2013）において『セラフィタ』の共訳に参加し、巻末に論考を寄せていたり、バルザックにおける神秘思想、宗教、哲学を特集した最新の *L'Année balzacienne 2013* に『セラフィタ』についての論文が掲載されたりと大いに活躍中である。この先は『ルイ・ランベール』や『セラフィタ』などに見られるバルザックの神秘思想と『人間喜劇』のさらに広範囲な作品とのつながりについての考察もぜひ期待したい。

Keisuke Misono, *Écrire contre le jansénisme : Léonard de Marandé, polémiste vulgarisateur*, Honoré Champion, 2012.

評者：野呂 康（岡山大学准教授）

本書とその著者

本書は、17 世紀の文芸者レオナール・ド・マランデの伝記記述とその著作の分析を軸とした、最新のジャンセニスム研究である。

著者の御園敬介氏（現福岡女子大学准教授）は、クレルモン＝フェラン第二大学にてドミニク・デコット教授の指導の下で博士論文を執筆し学位を取得した¹⁾。本書は専ら博士論文の出版を手がける書肆オノレ・シャンピオンから、パリ第四大学で教鞭をとっていたフィリップ・セリエ（パスカル研究）と、ドミニク・デコット（パスカル研究）の共同監修による＜リュミエール・クラシック＞叢書の第 92 巻として刊行された。

本書の構造

第一部「レオナール・ド・マランデとその家族環境」

第二部「論争以前 — 懐疑主義、護教論、通俗化」

第三部「論争に向けて — 『学者たち』の間での論戦への参与」

第四部「論争のために — マランデの反ジャンセニスム理論」

第五部「論争において — マランデの反ジャンセニスム運動」

第一部では、作家の生涯と家族環境が記述される。マランデは 1600 年頃に生

まれ、1670 年代後半に没したと推測される。多産な作家だが、主題やジャンルに一貫性はない。この時期のポリグラフ (polygraphe) の典型である。

表題中の「論争」とは、すべて「ジャンセニスム論争」を指す。第二部ではマランデの思想と執筆傾向が年代順に整理される。第三部以降では「論争」以前の執筆活動と「論争」の関係が問題となる。

処女作『人間の行為を裁く』(1624 年) はモンテーニュに倣った「懷疑主義」の書で、道徳や人間を考察対象とする。1639 年の『キリスト教哲学者』はキリスト教護教論の潮流に倣った作品で、懷疑論者から「護教論者」に移行したマランデは、信仰と理性の関係を論じる。『フランスの神学者』(1641-43 年) は当時流行した諸学の「通俗化」の試みに属し、難解な神学を平易な言葉で説明する「通俗化論者 (vulgarisateur)」²⁾ の書である。「論争」以前の執筆活動から伺える懷疑論、護教論、通俗化論者という三傾向が、「論争家」としての視座と執筆行為に受け継がれるというのが、著者によるマランデ論の核心である。

ジャンセニスム

『教会の遺産』(1652 年) から、「学者」に混じり神学論争に介入していたマランデは、1653 年以降ジャンセニスム「論争」に参加する。こうして、以前の護教論者と通俗化論者から反ジャンセニストの「論争家」へと移行する。本書の著者はマランデの論争書を二系統に分け、第四部と第五部で別々に論じる。

第四部では、直接ジャンセニスムを攻撃した論争書が扱われる。ジャンセニスムに関して、マランデが独特な解釈を提示するわけではない。むしろ、論争に護教論者、通俗化論者としての手法を用いた点に特徴があるとされる。さらに『ジャンセニスムに由来する国家的諸問題』(1654 年) を挙げ、神学論争に政治的視点をいち早く導入し、国家にジャンセニスム抑圧の理論的根拠を提供したとされる³⁾。

第五部では出来事に対するリアクションとして執筆された論争書が対象となる。マランデはソルボンヌで審議されているアルノーを攻撃し、1653 年の教皇勅書「クム・オカジオーネ」で五命題が断罪されると、その補足である小勅書「エクス・リテリス」(1654 年) の仏語新訳をだす。王権と高位聖職者会議は勅書の受諾確認のために「信仰宣誓書」を作成し全聖職者に署名を迫るが、マランデは「人間的教會的信」なる概念を提唱し、署名強制正当化の論陣を張る。

結論では、マランデをめぐる従来の二つのイメージが提示される。この作家をジャンセニスト側は、「あらゆる反論に値しない気違いじみた恥知らず」と蔑み、反ジャンセニストは「勇敢な恩寵の擁護者」にして「博学で雄弁な作家」と持ち上げた。この二つの像から、作家の特徴が抽出される。すなわち、蔑視を物ともせず果敢に論争を仕掛けたマランデからは、自己顕示欲と作家としての「虚栄心」が、そして多産で雄弁なマランデからは、筆の早さと軽快さを持ち味とした反ジャンセニスムの通俗化論者の像が導き出される。マランデは制

度的な教育を受けておらず、虚栄心にかられた独学の文芸者であったからこそ、反ジャンセニストから重用されたのだという。ゆえに「この人物は、＜ジャンセニズム＞という錯綜した問題が内包する多くの側面に関する研究上の手がかりを提供してくれる。」これが本書の結語である。

本書の成果と射程

第一に、本書はこの文芸者に関する最新の知見を提供する。第二に、素人文芸者による教皇勅書の翻訳が、当時の教権に公式に採用されたという事実は、従来なされたことのない指摘である。第三に、「信」の観念史に寄与しうる「人間的教会的信」なる神学概念が、一文芸者の独創であった可能性を示唆している。

従来、歴史家はジャンセニズムの定義に腐心してきた。これに対して、教会史家セイッサンスはジャンセニズムと反ジャンセニズムの表裏一体性を強調し、後者から前者を捉えるよう提案していた。本書はその提言を実践にうつし、反ジャンセニストの伝記記述を軸に、敵方からジャンセニズムを照射しようとした、一つの歴史記述なのである。

註

- 1) 御園氏による、本書出版前後の仕事を列挙する。

2004 年：「レオナルド・ド・マランデ、反ジャンセニストの論争家」（« Léonard de Marandé, polémiste antijanséniste », *Courrier du Centre International Blaise Pascal*, n° 26, 2004）

2007 年：『『プロヴァンシアル』に反論する、イエズス会士に送り込まれた密使 論争家にして通俗化論者レオナルド・ド・マランデ』（« Un émissaire des jésuites contre les *Provinciales* » (Intervention au colloque " Pascal et les jésuites. Le retentissement des *Provinciales* ", les 22-23 novembre 2007 au CIBP)）

2007 年：「フランスにおける反ジャンセニズム政策の形成 —— 1654 年 9 月の教皇インノケンティウス 10 世の小勅書 *Ex litteris* をめぐって ——」（『一橋社会科学』3 号）

2009 年：『17 世紀においてジャンセニズムに抗して執筆すること —— 論争家にして通俗化論者レオナルド・ド・マランデ』（クレルモン＝フェラン第二大学に提出された博士論文）

2010 年：『ジャンセニズムに抗して執筆すること —— 論争家にして通俗化論者レオナルド・ド・マランデ』（本書）

同年：『ジャンセニズムと反ジャンセニズム —— 近世フランスにおける宗教と政治』（一橋大学大学院社会学研究科に提出された博士論文）

同年：「ジャンセニズムの歴史 —— 信と不可謬性をめぐる論争を中心に」（パスカル研究会における発表）

2011 年：「ジャンセニズムと信仰の認識論」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』, No. 31, 2011, pp. 39-51.

2012 年：「ジャンセニズム論争と良心の自由 —— 「信仰分析」の問題を中心に ——」『思想』（岩波書店）, No. 1057, 2012, pp. 27-43.

- 2) 本論で用いる訳語は基本的に著者による『ジャンセニズムと反ジャンセニズム』（前註を参照）に基づく。

- 3) 「恐らくマランデは、ジャンセニズムを政治の問題と結び付けて正面から論じた 17 世紀唯一の著述家である。」（『ジャンセニズムと反ジャンセニズム』, p. 93. 註 1 を参照のこと）

評者：寺田寅彦（東京大学）

エミール・ゾラという 19 世紀を代表する作家の研究書につけられた『欲望する機械』という題に、読者はどのような印象を持つだろうか。単に比喩的な表現であると感じる読者もいれば、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの『アンチ・オイディプス』を貫く欲望する機械 *les machines désirantes* という概念を思う読者もいることだろう。実際、著者は『アンチ・オイディプス』から題名のみならず多くのものを得ていることを随所で詳らかにしている。それならば、本書はドゥルーズとガタリの著作を通してのゾラ読解とだけ理解すればよいのだろうか。否、そのような単純な内容ではないところに本書の魅力はある。

ドゥルーズとガタリが欲望する機械という概念で人間の経験を理解しようとし、また社会機構を解明しようとしたその哲学的試みはたしかに本書に反映されているが、著者はこの概念の文字通り機械的な適用を行おうとしているのではない。むしろ、もともとゾラの研究者にとっては親しいテーマである欲望 *le désir* と機械 *les machines* という観点をそれぞれ丁寧に検討し、かつての研究の成果を生かしながらもそれに安易に依拠することなく、さまざまな分析装置から独自の論を展開することでゾラの作品の面白さを存分に引き出そうとしているのだ。

たとえば欲望についてはかつての論考であればシルヴィー・コロの著作 (Sylvie Collot, *Les Lieux du Désir*, Hachette, 1992) がイマジネール分析の観点で身体描写と風景描写から一般的論理を導びこうと試みたし、また、一方の機械については古典的研究書となったジャン・ボリー『ゾラと神話』(Jean Borie, *Zola et les mythes*, Seuil, 1971) が詳細に論じている。この二冊はいずれもフロイト式精神分析学を意識した研究だが、著者はとくにこのボリーの著書を「オイディプス・コンプレクスや死の欲動などのフロイトの精神分析のためのツールを外挿的に適用した作品解釈」であるとして「わたしたちの関心をあまり引かない (本書 6 頁)」とした。ドゥルーズとガタリの『アンチ・オイディプス』は精神分析批判としてフロイトから遠く離れた次元の考察を行ったが、本書は同じようにともすればフロイトを適用するのみであった 20 世紀のゾラ研究からはるか先に論を展開させようとする。

だが、それはフロイトを無視しているということではない。本書にはフェティシズムやインセストのような精神分析学の主題が真正面から取り上げられており、著者はフロイトについて十分に配慮された解説を加えたうえで論を展開していく。だが、そこで著者は、当時のさまざまな資料やゾラ研究者アンリ・ミッ

トランによる生成研究の成果、さらにはミッシェル・セールのゾラ解釈（著者はセールの『火、そして霧の中の信号 — ゾラ』の訳者でもある）からマルクスの剰余価値のフロー・チャートにいたるまで、さまざまな装置を援用して多角的かつ独自の分析を行うのである。それは包括的ではないかもしれないが少なくとも横断的に論を進めた『アンチ・オイディプス』のスタイルを思わせるものでもある。

また、本書がなによりもテキストそのものの真摯な分析であることも特筆すべきことだろう。数多くの引用にはフランス語でどのような語であったかが丁寧に記され、それがどのように理解されるべきであるか詳細に検討が加えられている。テキストは文学テキストとして尊重され、かつ多くの領域からの視点で分析されるのである。それは本書が文化的考察であると同時に文学的分析であることを意味するが、文学的なテキスト分析の観点からも本書の中心軸が従来の研究と同じ位置にないことは興味深い。ゾラの作品研究でもレトリックの考察、とりわけ意味の修辞である提喩・換喩・隠喩に関する研究は多く、その中では機械に重点を置きつつ換喩を論じたケリー・バジリオの著作（Kelly Basilio, *Le Mécanique et le vivant ; la métonymie chez Zola*, Droz, 1993）が思い起こされるが、それに比べて本書では比喩という語すら数多くは用いられない。バジリオは主に『居酒屋』と『ボヌール・デ・ダム百貨店』を論じているのだが、著者は本書でこのデパート小説を論じるべく、やはりゾラ作品の機械を怪物という観点から論じたジャック・ノワレの『小説家と機械』（Jacques Noiray, *Le Romancier et la machine*, Corti, 1981）を引用し、ノワレが機械のメタファーを論じていることを踏まえたうえで、あえてマシニズム *machinisme*（機械主義）の観点からゾラ作品の世界観を分析する。このマシニズムは、セールとドゥルーズ／ガタリを参照しつつ著者が『獣人』の分析に用いた概念であり、この鉄道小説を訳した著者ならではの考察が放つ異彩に読者は瞠目させられるのである。

モノグラフィーでは扱いきれないゾラの作品の強烈な印象や作品の勘所を提示するために本書を形にした、と著者は「あとがき」で述べている。その思いがかつての研究成果を踏まえながらも独自のものになったところに本書の眼目があると言えよう。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 *cahier* および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。

なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇目的

日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇書評の対象

原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇推薦要領

学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文（200字程度）を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇締め切り 毎年3月・9月末日

◇宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください： cahier_sjllf@yahoo.co.jp

cahier 13

編集 研究情報委員会

発行日：2014年3月31日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿3-9-25 日仏会館505

TEL：03-3443-6671 FAX：03-3443-6672